

(89)

| | | | | |
|----------|---|--------|---------|---------|
| 氏名(生年月日) | ナカ 中 | オ 尾 | ナオ 尚 | ユキ 之 |
| 本籍 | | | | |
| 学位の種類 | 博士(医学) | | | |
| 学位授与の番号 | 乙第1253号 | | | |
| 学位授与の日付 | 平成4年2月21日 | | | |
| 学位授与の要件 | 学位規則第4条第2項該当(博士の学位論文提出者) | | | |
| 学位論文題目 | Coxの比例Hazzard-modelに基づくIgA腎症の腎組織所見の評価について | | | |
| 論文審査委員 | (主査)教授 杉野 信博 (副査)教授 東間 紘, 重田 帝子 | | | |

論文内容の要旨

目的

Coxの比例Hazzard-modelによる重回帰型生命表法を使用し、経過時間を考慮した多変量解析法で、IgA腎症の腎生検病理所見の予後に対する影響を検討した。

対象

昭和52年度から9年間に、IgA腎症と診断された108症例中、組織半定量化が可能で、十分な経過観察ができ、統計解析可能だった40症例。

方法

① 腎生検病理組織所見の半定量化には、次の代表的9所見を点数化した。

1. 完全糸球体硬化病変, 2. 部分糸球体硬化病変,
3. mesangium領域病変, 4. paramesangium領域沈着病変, 5. 半月体形成病変, 6. 末梢係蹄壁癒着病変,
7. 末梢係蹄毛細血管開存度, 8. 尿細管間質病変, 9. 間質細動脈血管開存度。

② 重回帰型生命表法の計算に当たり、従属変数である予後の決定には生検後の血清クレアチニン値(SCr)の推移で判定した。従属変数は上記の点数化された組織病変である。従属変数の回帰係数の統計学的評価には、t-検定を行った。次に、各項目に関して、予後に有利な症例と不利な症例リスクの比(リスク比)を計算した。

結果および考察

① SCrが2mg/dlに至るまでは、mesangium領域病変と半月体形成病変の2項目が相関関係($p < .10$)を示し、リスク比は4.517と9.87であった。

② SCrが4mg/dlに至るまでは、完全糸球体硬化の項目が統計学的有意性($p < .05$)を示し、リスク比は6.527であった。一方、mesangium領域病変と尿細管間質病変が3.0台のリスク比を示した。

③ Coxの比例Hazzard-modelによる重回帰型生命表法を用いると、IgA腎症の腎生検組織所見の予後に対する重みは一定ではなく、腎機能障害の程度と時期を考慮する必要があると考えられた。

結論

IgA腎症の腎生検所見を評価するにあたり、SCrが2mg/dlに至るまでの予後には、mesangium領域病変と半月体形成病変が重みを持つが、SCrが4mg/dlに至るまでは、完全糸球体硬化がもっとも重要で、ついで、mesangium領域病変と尿細管間質病変が重要であった。

論文審査の要旨

本研究はわが国に最も多い腎性腎疾患であるIgA腎症を対象とし、腎生検組織病変と予後との関係を検討したものである。その結果、腎機能障害早期までにはメサンギウム病変、半月体病変が、中期には糸球体硬化病変がその後の進行に影響が大であることを指摘したもので、学術的価値が高い論文である。

主論文公表誌

Coxの比例Hazard-modelに基づくIgA腎症の腎組織所見の評価について

日本腎臓学会誌 第XXXIII巻 第11号
1063-1070頁 (1991年11月発行)

副論文公表誌

- 1) ネフローゼ症候群. 日本臨床 46 (6): 1322-1325(1988)中尾尚之, 秋本典子, 佐中 孜
- 2) クリオグロブリン血症における腎障害. 腎と透

析 27 (臨増): 186-187 (1989) 中尾 尚之, 福田祐幹

- 3) 成人期IgA腎症の臨床. 腎と透析 26 (2): 203-210(1989)佐中 孜, 中尾尚之, 秋本典子, 杉野信博
- 4) 中期糖尿病性腎症と食事療法. 臨床栄養 79 (5): 542-548 (1991) 佐中 孜, 中尾尚之, 杉野信博